

芥川龍之介の物語には、個性的でありながら彼の独特な価値観や世界観を表現している作品が多い。彼の短編小説「Mensura Zoili」と「芋粥」、この二つの作品は、相違する時代背景による人物の言葉使い・人物描写の違い、そして類似している人物関係と主人公の葛藤の描写を通して、似ているテーマを違う手法で導き出している。

「Mensura Zoili」と「芋粥」では、違う時代背景によって、人物の言葉使い、そして人物描写が異なることにより、違うイメージが生じる。「Mensura Zoili」では、時代設定が近代で、フランス語・英語の使用が多く、現代的・西洋文学に現れる直接的な文章構成が多い。そして、カタカナ文字や、「サンチメートル」・「測定器」といった数値を思わせるような硬いイメージを醸し出している。一方、「芋粥」では、物語の設定が平安時代であるゆえ、古語の使用が多く、文章構成も間接的なものが多い。例えば、「いけぬのう、お身たちは」や「こまつぶり」（独楽のこと）と述べるなど、間接的な表現を使用し、ゆったりとしたイメージを醸し出している。

さらに、人物の動作の描写で、「Mensura Zoili」は「角顎は、ポケットから朝日を一本出して、口へくわえた」と動作をそのままに表現しているのに対し、「芋粥」では、「これは、焼栗を噛みながら、黒酒の杯を重ねてみた。」と、「盃を重ねて」という表現から、間接的で、回りくどい言い方をしている。これにより、登場人物の行動を、簡潔、またはゆっくりしたイメージで表現することで、彼らの性格を表し出している。また、「Mensura Zoili」で主人公は、角顎の話しに対して、「僕は、不快になった。」や、「少し莫迦莫迦しくなった。」と言うなど、自分の感情を直接表現している。しかし、「芋粥」での五位は、利仁の提案に即答できず、ようやく言えたのが「いや……忝うござる。」である。この一言を繰り返したり、「・・でござるかな」、「・・ござらぬのう」などののんびりとした利仁との受け応えは、五位の感情は全く表に現れないことが、読者には容易に理解できる。このように、二つの作品は、時代背景・言葉使い・人物描写の違いにより、それぞれ異なる人物描写の手段を取っている。

「Mensura Zoili」と「芋粥」の類似点は、その独特な人物関係、そして主人公の葛藤の種類にある。二つの作品は、ともに二人の登場人物により話が繰り広げられる。さらに、主人公はどちらも受動的な存在である。ゆえに、脇役が主導権を握り、物語を進めることで、最終的にテーマが導き出される。「Mensura Zoili」では、脇役の男が、主人公にゾイリア共和国の価値測定器の存在を紹介しながら、会話が進む。同じく、「芋粥」では、脇役の利仁が、主人公の五位を誘い、彼の「芋粥を飽きるほど食べる」という願いを叶えさせてやる。さらに、多くの他の物語と違い、「Mensura Zoili」と「芋粥」の中では、登場人物間の葛藤が存在しない。物語を進めるのは脇役の人物でありながら、真の葛藤は、主人公の内面にある。「Mensura Zoili」で、主人公の抱えてる葛藤は、角顎がいう、「測定器の正確を否定するか、作物の価値を否定するか」というディレマ、そして、価値の基準とはそもそも何なのか、である。同じく、「芋粥」で五位は、「芋粥を食ふ時になると云ふ事が、さう早く、来てはならないやうな心もちがする」と、夢が目前になって心の変化が表れる。その理由は、芋粥を飽きるまで食べたいという願望と、食べたなら自分の人生の目的が無くなるという恐怖心の、相反する二つの感情の間の葛藤が生じたからである。物語では、五位のこの「矛盾した二つの感情が、互に剋し合ふ後には、境遇の急激な変化から来る、落ち着かない気分が、今日の天気のように、うすら寒く控へてゐる。」と、彼の心境を述べてある。

このように、両方の物語での脇役は物語の進行役にすぎず、葛藤の対象ではない。「Mensura Zoili」での葛藤は、話者の「価値」の定義基準と、ゾイリア共和国の価値の基準との違いであり、「芋粥」でそれは、五位の願望と、それをかなえさせない状況、または、叶えられることを恐れ

る彼自身の心境の矛盾である。しかして、芥川は、登場人物による物語の進行、そして主人公の内的葛藤を通し、独特な方法で主題を表している。

「Mensura Zoili」と「芋粥」の主題は、表面的では異なって見えるが、その本質は両方、「視野の狭さ」である。「Mensura Zoili」で、Zoili共和国は、自国の物の価値を測定器で測るのを禁じている。Zoili共和国は、芸術の価値を判断するMensura Zoiliを唯一の基準として測る。しかし、主人公は、このような狭い、画一された価値の基準に疑問と反感を抱き「莫迦莫迦しい」という言葉で表現する。

また、「芋粥」での五位は、自分の人生の目的を一つに限定し、目的を持っていること自体を生き甲斐として、情けない自分のことを慰めている。しかしながら、実は彼はこの目的を叶えようとしていない。その理由とは、「容易に「芋粥に飽かむ」事が、事実となつて現れては、折角今まで、何年となく、辛抱して待つてゐたのが、如何にも、無駄な骨折のやうに、見えてしまふ」とあるように、人生の目的を持っているという自体だけに価値をおいていた五位にとって、それが叶った後に訪れる喪失感が怖かったからである。芋粥を飲んだ後、五位が「（芋粥を飲む）前の彼自身をなつかしく、心の中でふり返つた。」と思うことから、彼自身はこの願いを叶えることを恐れていたことがわかる。芥川は、五位のように、またZoili共和国のように、人生の目標、価値を一つの狭い基準で判断すること批難している。

「Mensura Zoili」と「芋粥」、二つの作品は、その時代背景、人物の言葉使い、人物描写などの違いがある。しかし、「視野の狭さ」という共通のモチーフを持ち、主人公の内的葛藤を通して主題を導き出している。芥川は、この二つの作品で、画一された判断基準を持つことの危なさを表し、柔軟で受容的な価値観の重要性を伝えている。